

音楽科

音楽科教育における学力

—学力の構造と授業展開—

泉谷正則

1. はじめに

変化の激しい現代に、学校教育は生徒に何を育むべきなのか。新学習指導要領においては、その答申に見られる次のような言葉、つまり、「生きる力」、「基礎的・基本的な知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学習意欲、学習習慣」、「豊かな心、健やかな体」といった言葉によって示されている。

そして、音楽科においては、このような学校教育の進む方向を受けて次のような点を重視しようとしている¹⁾。

- ・思いや意図をもって表現したり聴いたりする
- ・生涯にわたり音楽文化に親しむ
- ・音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解する
- ・音や音楽を知覚し、その特質を感じ取る
- ・思考・判断する
- ・音楽の面白さ、美しさを感じ取る
- ・根拠をもって自分なりに批評する
- ・我が国や郷土の伝統音楽

音楽科教育がイメージする生徒像は、音楽によって生活を豊かで潤いのあるものにする姿であると筆者は考える。その姿をイメージしながら、日々の音楽の授業を通して合唱の楽しさを感じて欲しい、楽譜を見て歌ったり演奏したりできるようになって欲しい、色々な音楽の魅力を感じて欲しいと考え授業をつくっているのである。週1時間程度という僅かな音楽の授業が表面的でその場限りの楽しみを感じるだけの授業になるのではなく、生徒に確実に音楽的能力をつけさせより深い楽しみを音楽から得ることができるようにするこ

とは音楽科教師の課題であろう。その意味で、新学習指導要領において音楽を構成する要素とそれらが醸し出す特質や雰囲気、また、それらを表す用語や記号が学ぶべき「共通事項」として明記されあらゆる音楽活動に活かされるものとして位置づけられたことは重要なことである。

本稿では、音楽科教育が進むこのような方向を視野にいれながら、音楽の授業において具体的にどのような能力を獲得させていくのか、つまり、音楽科における学力とはどのようなものかについて述べ、その実践例を紹介する。

2. 音楽科における学力

学力については緒論であろうが、筆者は、基本的には「内容(～を)と行動(～する)」とによってこれを把握したい。学力をできるだけ簡潔で分かり易い構造で説明することによって、明確な目標と評価の視点をもった授業づくりが可能になり、また、様々な方法や形態で行われる音楽の授業についてその意義を説明すること主張することができるからである。

(1) 音楽科における「教育目標の分類学」の援用

筆者は、これまで、音楽科教育が目標とすべき内容と行動とを構造的に把握しようとした緒論について比較検討してきた。

周知のように、ブルームらによって試みられた「教育目標の分類学」は、学校教育が目標とすべき行動を認知的領域、情意的領域、精神運動的領域の3つと、各領域のサブカテゴリーとに分類するものであった(表1)。

表1 ブルームによる行動の分類²⁾

精神運動的領域	情意的領域	認知的領域
	1 受け入れ	1 知 識
	2 反 応	2 理 解
	3 価値づけ	3 応 用
	4 組 織 化	4 分 析
	5 個 性 化	5 統 合
		6 評 価

レゲルスキは図1のように音楽科教育における内容と行動を示した。そこでは、「感情」という行動が情意的な行動として強調され、具体的な授業展開と結びつけて説明されている。また、関心や態度は行動目標の対象としてではなくどのような場面においても強調されるべきものと考えられた。さらに、内容（～を）にあたるものは概念領域と呼ばれ、「メロディー、拍子、音色等」と「表現」とによって表された。レゲルスキは、前者は音楽の属性であり、後者はそれら音楽の属性によって具現される人間感情の内容であると説明している。

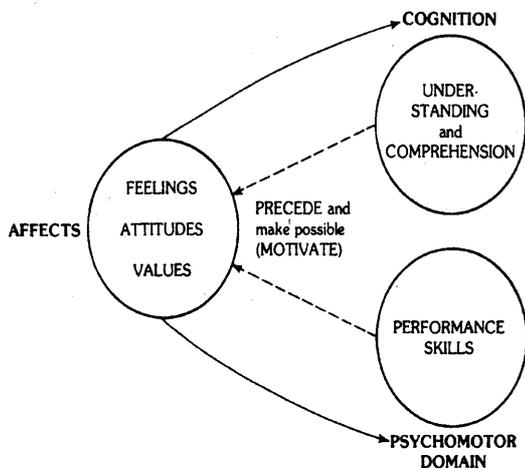


図1 レゲルスキによる行動の分類³⁾

また、M. テイトとP. ハックは、音楽科教育の構造を行動と内容とによって図2のように表した。ここでは、行動は思考行動、感情行動、共有行動に分類され、思考行動に対応する内容として音楽特性が、感情行動に対応する内容として人間

経験が対応させられている。感情行動に対応する内容は、「イメージ」、「隠喩」、「生のアナロジー」として具体的に説明された。また、思考や感情を共有するという共有行動が重視されている。

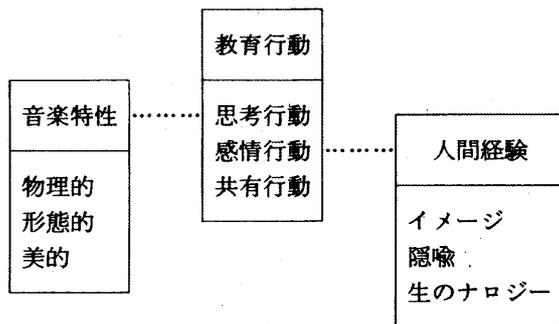


図2 テイトとハックによる内容と行動の分類⁴⁾

以上のように、音楽科教育においてその目標となる行動や内容は、教科の独自性に合わせながら、より具体的な授業展開や評価に結びつくものとして論じられてきているのである。

(2) 音楽科における学力

筆者は、音楽科において期待されるであろう様々な力を可能な限り純粋かつ分かりやすいものに分類、整理しながら、基本的には、「内容（～を）と行動（～する）」とによって、図3のような構造によってとらえるよう試みた。つまり、「音楽的能力」を中心として、それを「操作する」、「行動する」、「積極的な感情をともなっている」が囲むような構造である。

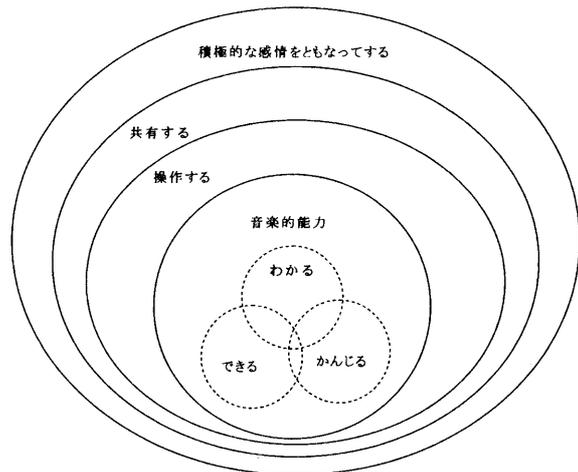


図3 音楽科における学力⁵⁾

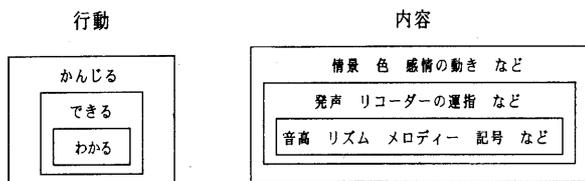
以下、それぞれの行動とそれに対応した内容と

について説明する。

①音楽的能力

音楽的能力は、「わかる、できる、かんじる」といった一連の行動と、それに対応する内容とによって構成される(図4)。

図4 音楽的能力



「わかる」は、比較的客観的な行動であり、2拍子と3拍子との違いがわかるなど、音楽の要素(音量、長短、音高、音色、リズム、メロディー、テクスチャ、調整、形式、及びそれらの関係)について知覚することである。また、音楽の歴史、作曲家、楽譜、記号などについて知ることもここに含む。

「できる」は、歌う姿勢ができる、腹式呼吸ができる、リコーダーの運指ができるなど、技術的なことに関わる行動である。

「かんじる」は、主観的な行動であり、音楽から色や自然の景色や、抽象的な形などの絵画的、視覚的イメージが想像されたり、心に描かれたり、あるいは「このメロディーは優しく語りかたりかけるようだ」のように感情をともなって反応したりといった行動である。また、そのような断片的なイメージや感情の動きというよりも、鳴り響く音楽そのものに感動するといった行動もここに含む。例えば、合唱において期待されるいくつかの音楽的能力のうちの一つは、「腹式呼吸で喉を開いた歌声と地声による歌声の音色の違いがわかりながら、技術的にも前者の歌声で歌うことができ、その歌声をきれいだな、柔らかいな、迫力があるなどとかんじる」のように考えることができる。

②操作する

操作するとは、音楽的な課題を解決するために、自分の中に獲得され蓄積されている音楽的能力を

使用する行動である。例えば、音符や休符の名前や長さについて覚え(わかる)、リズム譜を見て手拍子ができる(わかる、できる)ような学習を行った後、リズムを自分で創作しそれを手拍子で演奏することができたなら、そこに、この操作するという行動が起こっていると考えられるのである。

③共有する

共有するとは、他者の音楽的行動と自己の音楽的行動とを比較しながら自己の音楽的行動を高め、さらに、その高められた自己の音楽的行動を他者に伝える行動である。例えば、数人のグループで何らかのイメージに合ったリズムを創作したとする。その時、「このイメージにはこんなリズムが合うのではないか」といった話し合いが活発に行われ、1つの作品にまとめることができた時、この共有するという行動が起こっていると考えられるのである。これは、まさに音楽を演奏している時にも起こる。例えば、合唱をしている時、歌声に込められた他者の感情や思考を受け入れながら、自らの感情や思考が深まり、それを歌声によってさらに他者に伝えるという行動が自然に起こっていると考えることもできる。

④積極的な感情をともなってする

積極的な感情をともなってするとは、以上の行動を嫌々するのではなく、意欲的にすることである。学習指導要領の文言にある感心・意欲・態度と同じであり、音楽学習に対する比較的軽い積極的な感情から、何らかの音楽学習をより深く価値づけるようなより強く一貫した積極的な感情までを含む。

以上の行動は、相互に作用しながら総合的に高まるものであり、高めるべきものである。つまり、操作する行動だけをいくら強調しても、そこに音楽的能力の積み重ねがともなっていなければ、操作する行動も高まってははいかないであろうし、また、その場の楽しさだけしか強調されないような授業をいくら繰り返しても、その楽しさはより豊かなものにはならないと考えられるのである。

3. 実践例

以上のように学力をとらえることで、どのような授業展開が考えられるのか、その実践例について述べる。

(1) 実践例 1

①題材：自ら感じ、考え、豊かに表現する合唱表現への導入

②対象学年：7年生(中学校1年生)

③実施時期：2010年6月

④計画

第1次 合唱曲を構成している音楽の要素について考え、それをもとに歌い方の工夫を考える。(1時間)

第2次 考えを交流し、合唱表現を深める。(1時間)

⑤題材について

本題材は、混声3部合唱『マイ・バラード』に挑戦し始め、音楽記号や強弱や各パートの旋律の重なりなどを意識して歌い始めた時期に、音楽を構成している要素について気づかせ、自ら合唱表現を迫及できるようにさせていこうとするものである。

⑥目標

- 音楽の要素について説明できる。(わかる)
- 音楽の要素について、それによって表現されるイメージや感情について、また、技術的なことについて自分の意見を言うことができる(わかる、かんじる、できる)。

(例)

「みんなで」、「大きな」、「声を」の後に休符がある(わかる)ので、そこを意識しながら、語りかけるように(かんじる)歌う(できる)。

- 音楽の要素をポイントにしなが、グループで「マイ・バラード」の歌い方について話し合えることができる(操作する、共有する)。
- その歌い方を活かして合唱をすることができる。(できる)

⑦授業の概要

音楽は何でできているのか？音楽を構成している要素は何か？について、

音楽には()がある

の()にあてはまるものを考えさせる。さらに、音楽をカレーに、音楽の要素をカレーの具に例えてイメージさせたり、音楽を聴いて気づかせたりする(例えば、大きい音と大きい音を聴かせたり、2拍子と3拍子の曲を聴かせたり)。生徒からは、「長い音短い音」、「リズム」、「強弱」、「歌詞」、「感情」などの意見がでた。そこから、音楽の要素を次のような図にまとめて確認させた。

音楽は何からできてる？

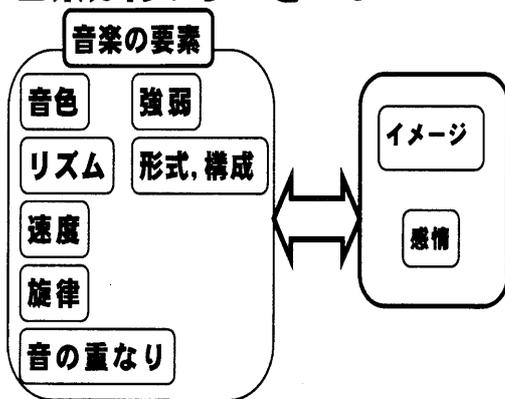


図5 音楽の要素の図

この音楽の要素をポイントに、歌い方を工夫しようということで、4～5人のグループで、「マイ・バラード」の工夫点を話し合い、模造紙の楽譜に書き込ませ、発表をした。次は、そのひとつである。

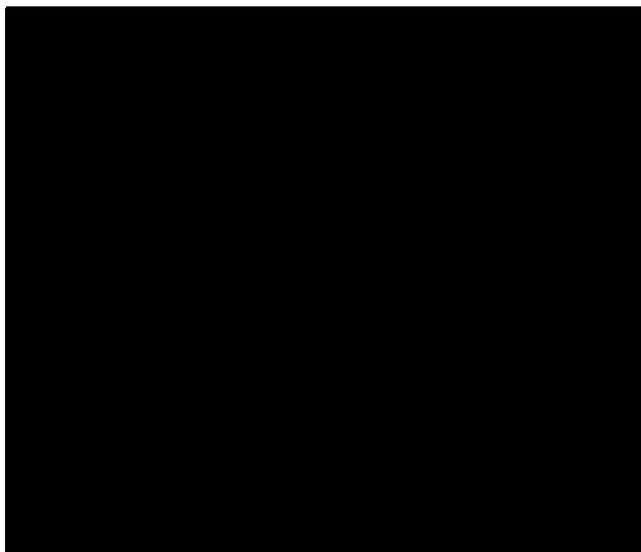


図6 グループで考えた歌い方の工夫点

表2 生徒の振り返り

今日は音楽の材料について学びました。いろいろな成分が混在して1つのものが出来上がっているのだと思いました。
今日は音楽の要素をポイントに歌い方を工夫しようという目標だったけど、うまく班で協力して話し合えました。
班活動で自分の意見をみんなにしっかり伝えられて良かったです。他の人の意見も聴けてよかったです。自分たちが歌っている所をイメージしながら考えることができました。
他の班は自分たちと違う考えがたくさん出てきておもしろい。これをもとに歌うときには意識して歌うと、いつもより音に気持ちが入ると思う。
強弱や高低についてたくさん考えることができました。

(2) 実践例2

①題材：リズムを感じ、表現しよう

②対象学年：7年生(中学校1年生)

③実施時期：2010年9月

④計画

第1次 音符・休符の名前と長さの復習。

リズムパターンを手拍子する。

(1時間)

第2次 イメージに合ったリズムづくり。

(2時間)

⑤題材について

本題材は、中学校の教科書にある音符及び休符の全てについて知り、基本的なリズムパターンを手拍子できるようにし、それらの既習事項を使用しながら、イメージに合ったリズムによる曲を創作するものである。リズムの学習は、合唱表現の追及や音楽を豊かに感じ取りながら鑑賞したり、自らのイメージに合った音楽を創作したり、といったあらゆる音楽活動の基礎となるものである。よって、7年生(中学校1年生)という時期に計画的に学習しておくことで、今後の様々な音楽活

動への応用を期待することができると思う。

⑥目標

- 音符及び休符について知る(わかる)。
- 基本的なリズムパターンを手拍子する(わかる, できる)。
- イメージに合ったリズムをグループで創作する。(わかる, かんじる, 操作する, 共有する)

⑦授業の概要

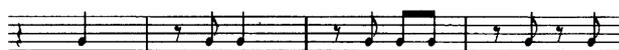
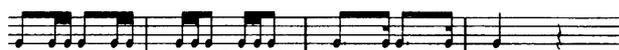
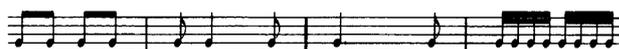
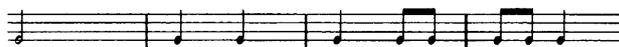


図7 リズムカード

図7のような2拍のカードを手拍子したり、グループでカードを組み合わせたものを手拍子して発表したりしながら、リズム譜を手拍子できるように学習を進めた。その後、単にカードを組み合わせたリズムではなく、イメージや感情と結びつけてリズムを創作してみよう、ということでリズムの創作を個人やグループで行った。次に示したものは、個人で創作した作品である。作品からは、生徒が自分の表現したいイメージや感情と、リズムとを結びつけながらリズムを創作しようとして

いる様子が分かる。

キュラムを作成していきたい。

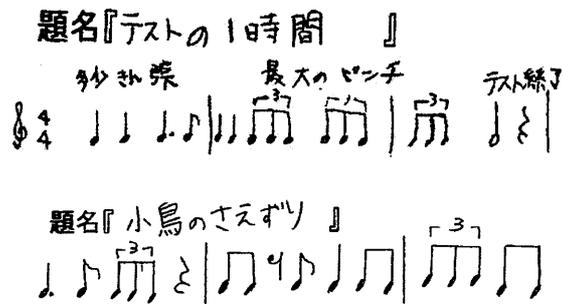


図8 個人で創作した作品

表3 生徒の振り返り

作った楽譜が休符が多いので、逆に速いリズムを取り入れたら良いと思った。
今日はリズムを考えて、タイとかつながるリズムを考えるとよりおもしろいリズムになったからまたやりたい。
冬のリズムが半分できた。もっと冬のイメージが伝わるようにしたい。
私たちの班は四季をイメージしてリズムを作りました。3人違うリズムをするので、難しかったけど、楽しくできました。続きを早くしたいです。
まだ2小節までしかできていないけどイメージができた。テーマも自由!!そこが良かった。
リズムを難しく考えてしまったので手が少しくなりました。3連符のリズムがおもしろかったです。
班の人からアドバイスをもらったり協力しながらリズムを作れた。とても強弱がついていて面白いリズムです。

4. おわりに

音楽科における学力について述べ、目標の作成と授業展開の実際について紹介した。今後は、評価について詳細な検討を行い、さらに、このような実践を積み重ねることで中学校3年間のカリ

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説 音楽科編」，教育芸術社，2010.
- 2) Benjamin S Bloom(ed.):Taxonomy of Educational Objectives Handbook 1 Cognitive Domain,David Mackay Company INC.New York, 1956.
Benjamin S Bloom(ed.):Taxonomy of Educational Objectives Handbook 2 Affective Domain,David Mackay Company INC.New York, 1964.
- 3) Thomas A Regelski: Principles and Problems of Music Education, Prentice-Holl,Inc.1975.
- 4) Malcolm.Tait&Paul Haack:Principles and Process of Music Education New Perspectives,Teachers College,Columbia University,1984 (千成俊夫，竹内俊一，山田潤次訳『音楽教育の原理と方法』音楽之友社，1991) .
- 5) 泉谷正則：「音楽科における学力(2)」，学校教育，No. 941，pp. 50-53，1995.